

ミステリ読書案内

2024. 4. 28 発行元

第570号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

読書冊数 10000 冊突破

2月末に、私自身の生涯読書冊数が10000冊を突破した。(ミステリ作品だけを数えた数) 若い頃にはこんなに読むことになるとは想像もしていなかったが、一步一步の積み重ねが基本なのだなぁと思う。

50数年で10000冊

大学に入学した時点がスタートで、それから50数年の年月。一年平均にすると200冊弱。もっとも読書中断期間が途中で8年あるので、実質は一年に200冊以上をこなしたことになるけれども。

学生の時代、仕事をするようになってからの時代、その頃は「読書」が生活の中心ではなかったのも、それほどペースは上がらなかった。年間400～500冊とこなせるようになったのは、余裕が出てきたここ15年くらいのこと。いずれにせよ10000冊に達したことは自分自身にとって喜ばしいことだ。

50冊ごとの区切りには記念の本を読む

以前にも書いた通り、読んだ本はすべて記録している。そして、50冊進むごとに記念になるような作品を選んで読むことにしている。1000冊目はクロフツの『ボンズン事

件』、200冊目はアイリッシュの『幻の女』という具合に。

10000冊目には船戸与一の『砂のクロニクル』を選んだ。かなり前の『このミステリーがすごい!』の一位にランクされた作品。過去の『このミス』一位作品のほとんどは既読なのだが、『砂のクロニクル』は未読だったのだ。ちょうどいい作品が残っていた。

多く読んでいる日本作家は…

右上の表に私が読んでいる日本作家の読書冊数上位の十人を並べてみた。そもそも著作数が多い作家が並ぶのが当然で、西村京太郎は一万冊の5%以上を一人で占めている。赤川次郎も間もなく西村の数に並ぶと思う。

ここに登場した十人の作家が私の「好み」というわけではない。単純に作品数が多いだけ。私が好きな作家は寡作の人も多いので、読みたいと思っても本そのものがないの

《私の日本作家別読書冊数ベスト10》

1. 西村京太郎	523冊
2. 赤川 次郎	457冊
3. 斎藤 栄	332冊
4. 森村 誠一	266冊
5. 和久 峻三	224冊
6. 梓 林太郎	194冊
7. 今野 敏	185冊
8. 辻 真先	173冊
9. 山村 美紗	136冊
10. 島田 一男	136冊

でどうしようもない。まあこうやって作家名を並べてみると私も古々しい昔の読者だと思ってしまう。

海外の作家で一番多く読んでるのは当然のごとくE・S・ガードナー。120冊である。次に多いのはジョルジュ・シムノン。

生涯に読める本の量は…

あと十年ぐらい元気に本を読むことができたらプラス4000冊くらいか？ 一人の人間が生涯をかけて読める本の量には限りがある。もちろん職業人として書籍関係に関わっている人は別格だと思うが、私のような素人では一生かけて15000冊読破が妥当なところか。せいぜい「本が読める」ことを大切にしていきたい。

船戸与一「砂のクロニクル」

1991年毎日新聞社。その後新潮文庫に入り、私が読んだのは小学館文庫の上下巻。1991年当時、私は読書中断期間に入っていて完全にミステリから離れていた。読書に復帰した後も長い間読まないままにしていた本。自分の10000冊記念にということで本書を選んだ。『このミステリーがすごい!』の年間ランキング一位に入った誰しもが認める大傑作。

舞台はイラン領内のマハバートを中心にした地帯。イラン、イラク、シリア、旧ソビエト内のアゼルバイジャンなどに分断されて生活しているクルド人がテーマ。時期はイラン・イラク戦争が終結した直後で1989年頃の一連の出来事となる。基本的にはイスラム教の派内の対立もあって、弾圧され続けたクルド人が聖地マハバードを奪還しようと武装蜂起を計画し、それを抑え込もうとするイラン革命防衛隊との戦いに至る様子を描いたものと言える。そこに二人の日本人が登場してくる。共に周りからは「ハジ」と呼ばれているのだが、一人はクルド人の集団の中でひっそりと生きる隻脚の男。「おれ」「わたし」などの表記で、主人公的な立場である。もう一人は駒井克人。武器商人で、クルド人勢力からカラシニコフ二万丁を調達するように頼まれて、旧ソビエトからカスピ海を通過してイランに潜り込もうと行動する。クルド人ゲリラの指導者、そして革命防衛隊の若き隊員などが各章ごとに話し手の中心になって物語が進む。それぞれの理想もあるのだが、行動を進めていく中では思ったようには物事は進まない。「戦争」は個人の思いなどは簡単に押し流してしまう。ウクライナ、パレスチナのガザなどの紛争が続く現在も、考えさせられることの多い作品である。